

## 17-7 ウエペケレ「アコロ エカシ イレス」解説

語り手：鍋澤ねぷき

萱野：私は一人の少年でした、と。おじいさんに育てられて、何不自由なく生活しておった。何不自由なくということは、おじいさん自身が煮炊きをしたのは見ないのだけれども、朝になると、あったかいごはんができる、おいしい食べ物ができるというふうに、まだ夜も同じように、そういう生活を繰り返しておった。

ある日のこと、おじいさんは「今晚は決して、その、どんな音、物音がしても、動いてはいけませんよ」と言いながら、早く食べ物を食べさせてくれて、私は寝た、と。

鍋澤：うん。

萱野：どんな音がしても動くなと言われたので、まあ、自分の寝る場所で寝て、じっとしておると、すっかり暗くなると家のまわりが、ガサガサゴソゴソ音がして、話し声、外へ聞こえるのは、

鍋澤：うん。

萱野：必ず人間が、おったはずなのにさっぱり、「何だか、なかへ入るのは嫌だなあ、嫌だなあ」と言って、「おまえ入れよ」、「やだ」、というような話し声が外へ聞こえた。

そうしておるうちに、二人だけが選ばれたらしくて、なかへ入って。入り口のところでこう、あの、アイヌの家ですからこう、カヤの囲いですね。そのカヤを一本をこう引き抜いてこう、あの、**cuna ape** というのは、囲炉裏のなかでこんもりとこう、火を埋めてあるわけですね、おき〔燠〕なんか。そこへ、その、カヤ一本チュチュッと刺してサッと抜くと、それポッと火い、火いつくんです。その、その木に **etaye wa** [～を引き抜いて] た(?) それを、カヤ一本抜いて。

鍋澤：うんうん。

萱野：hoka epoypoye [火をかき回す] と、こう、木に……囲炉裏にボソボソッ  
とこう刺してパッと抜くと火がつくんですが、そうやって、辺りをこうう  
かがった。

そうすると、あたしも何か、見たくて、いわゆるおっかないもの見たさ  
というか、その、袖口からこう、そっと見たら、あたしのおじいさんが座  
っておる場所で、大きなクマが、今にも、その、飛びかかるというような、  
そういう姿勢で、寝て、こう、両手のとこへあごをのせたようなかっこう  
でいた、と。

そうすると、その男二人がこう、その、カヤを引き抜いて、辺りを見回  
したらば、そのクマを見たので、先を争って外へ逃げ出した。それを、そ  
の、あたしのおじいさんであったはずの者が大きなクマになって、その、  
aynu [人間] たちを追いかけて外へ出て、かみ殺したり、叩き殺したり  
する、と。外での声は pewtanke [危急を知らせる叫び声] という危急の  
声を、知らせ合う声、あるいは泣き叫ぶ声、しばらく続いてそれも終わっ  
た、と。

だら、次の朝になって、起きてみると、やっぱりもとのおじいさんの姿  
になっておっていて、「すぐ近所の川下のほうで、おまえの、親戚のおじ  
いさん……おじさんがいるから、呼んできなさい」と、そう言われたので、  
私はまあ、走って行って、それを呼んできた。

そうすると、家へ来て、あたしが少し遅れて来たのに、えー、一緒に来  
たおじさんたちがなかへ入って、あたしもちょっと 2、3 歩遅れて入っ  
てみると、家のなかから、その大きなクマが外へ飛び出した。それを、窓か  
ら飛び出したので、その後へ、一緒に来た人たちは矢を射て、そしてすぐ  
に近くでそのクマは死んだ、と。

皮はいで、まあ神様として送ったわけですけれども、夢に見た、見して  
くれたのは、昔々、その、この場合、pako oyan [流行病] でないんだな？

鍋澤：でない。

萱野：あの、topattumi [夜襲] だな？

鍋澤：topattumi。

萱野：うん。

鍋澤：topattumi。

萱野：うん。

「昔々、その、おまえの父や母が元気で、ここで村を持っておった時に、よそ村から **topattumi** [夜襲] という、いわゆる夜盗に襲われて、

鍋澤：ま、戦だな。

萱野：うんうん。襲われて全滅しかかった時に、おまえだけをその、外の祭壇の後ろへポンと置いて、祭壇を押し倒して、『たくさんあたくしは祭った神様がおりました』と、『その神様のどの神様が……か、来て育てて下さい』と言ったのに、どの神様も目をつぶって知らん顔をした。

それを見たあたくしは、その、知らぬ顔もできないので、人間の姿に身をかえて来て、おまえを育てたけれども、年をとったし、もう神の国へ帰りたいので、神として行ったのだから、後は泣かずに、おまえは一人前の男になって、私は **nupuri kor kamuy** [山を領有する神様]、山にいる神様として、お神酒をあげてくだされば、いつもそれは受け取ることができるから」と言いながら、そのおじいさんが夢枕に立った。

そういう同じような夢を、おじさん……、一緒に来た人間……、おじさんたちも見たらしくって、まあ、**onkami** [礼拝する] しながら、礼拝しながら、いろいろと、まあ、ていねいにお祭りをして、えー、あげた、と。

その後、あたくしも大人になり、嫁をもらって、何不自由なく生活して、まあ、生活しておる、クマ狩りのなかで私のおじいさんらしき形をしたクマを一度とったりしながら、まあ、成長して、今では一人前の大人になっておりますが、**kamuynomi** [神に祈る] をする時には必ず、その **nupuri kor kamuy** という山の神様に杯をあげ **inaw** [木幣] をあげることを忘れずに、あたくしは生活をしております、と、一人のアイヌが語りました。

鍋澤：うん。

萱野：こういうことだな？

鍋澤：そうかい、そう……。